



さて、終業式も無事終わり、いよいよ夏休みに突入。善は急げと、俺たちは早速地球に向かうことにする。俺の家もジョージ一人くらいなら、なんとかなりそうだ。美月の祖父母宅も問題ないようなので、とりあえず東京行きの手配だけを手配して、あとは野となれ山となれ。いやはや、まったくこのチームはこういう行き当たりばったりが多い。いったい誰のせいなのだろうか。いや、間違っても俺のせいじゃない。リーダーでも、そこまでの面倒は見切れない。いや、見たくても不可能だ。あいつらの暴走ぶりは俺のキャパを越えてしまっている。どうせまた、あちこちで起こした騒ぎの後始末をしなきゃいけなくなるだろうから、俺は非常に気が重いわけだ。それに……

「おい、みんな早いね。気合い入ってるねえ」

いつものように、待ち合わせ時刻ぎりぎりにケイが現れて、これで全員集合。さすがの遅刻魔ジョージも今日は遅れずに到着済みだ。どうやらサムに起こしてもらったらしい。ここはL2ステーションの中央宇宙港。近距離シャトルターミナル前の広場である。夏休みとあって、ターミナルには、学生風の乗客も多い。

「あんたが遅いんでしょ。ぎりぎりじゃない」

すかさず美月が突っ込みを入れる。

「これで全員ですね。まだ搭乗時刻には少し間があるので大丈夫ですよ」

とマリナ。

ここからは、地球近傍の各ステーションや月への小型シャトル便が出ている。80人乗りほどのシャトルだが、多い時間帯は20分に一本ほどの頻度で飛んでいるから、なかなか便利である。この宇宙港は、太陽系内の惑星間航路や、太陽系に近い恒星間航路の船も発着しているのだが、アカデミーやスペースガードの基地であることもあって、本数はそれほど多くない。こうした長距離路線の多くは、地球静止軌道ステーションや月軌道面にあるルナ・ステーションの宇宙港を起点としている。俺たちが乗るのは、第6静止軌道ステーション行きのシャトルである。そこで、地球行きの中型シャトルに乗り次ぐことになる。そう、あのシャトルだ。忘

れもしない、俺と美月が出会っていきなりの大騒動に巻き込まれたTS300型シャトルである。そもそも、あれがすべての元凶だったのだ。あのシャトルで一緒にならなければ、俺は美月に下僕扱いされることもなかった。でも、もしどちらか一方が別の便に乗っていて、一人だけあの状況に置かれたとしたら、そう考えるとちよつと寒くなる。俺と美月の両方がいて、初めてあの事故を乗り切れたわけだ。一緒に乗り合わせなければ、俺か、美月のどちらかは、ここにいなかったかもしれない。いや、あいつのことだ。もしかしたら俺がいなくても、なんとかしたかもしれないが……。もし、俺たちが入学式当日に出会うことがなかったら、今頃俺はどうしてるんだろうな。

「ケンジ、何をポーツとしてんのよ。行くわよ！」

「あ、ああ」

まあ、あんまり深く考えるのはよそう。結局、今がすべてだし、この先どうなるかもわからないのだから。



チェックインカウンターはそれなりに混雑していた。大きな荷物を持った家族連れやら、俺たちみたいな学生風のグループも多い。20分ほど並んで、俺たちはボーディングパスを受け取る。受け取ると言っても電子的なものだ。ボーディングパスの情報はDIユニットに保存されていて、搭乗ゲートでは自動的にチェックされる。自分自身は、インターフェイスを経由した仮想画像として内容を見ることができし、人にそれを見せるために他人と情報共有もできる。実は、荷物をチェックインする必要がなければ、そのままゲートに向かってもよかったのである。ボーディングパスの情報は、直接オンラインでも受け取ることができるのだ。

俺たちは、アウトバンドの案内に従って搭乗ゲートに向かう。途中、セキュリティチェックポイントを通過するが、特に通るだけで何もする必要が無い。だが、荷物や体はすべてスキャンされ、不審物がないことを確認される。ID情報やボーディングパス情報も、自動的に読み出されてチェックされるのである。考えようによっては気持ち悪いが、こうしたチェックはすべてコンピュータが行っていて人間は介在しないので、プライバシーは守られている。なにより、荷物を開けたり、IDを見せたりという手間がかからないのは悪くない。こうしたインターフェイスを介した強制的なアクセスは、法律で決められた場合に限って認められている。

シャトル・ベイはターミナルの建物の地下、正確に言えば、円筒形の宇宙都市の内部空洞面にある。現在の宇宙都市の標準形は、内部を円筒形にくりぬいた形の正三角柱が透明強化シ-

ルドの円筒の内側に接しているような形だ。人工重力が一般化して以来、宇宙都市の回転は遠心力を使うためでは無く、単に昼夜を作るためだけに使われている。円筒は24時間で一回転し、三角柱の各面はそれぞれ、8時間差のタイムゾーンになっているのである。一般にゾーン1から3と呼ばれる各タイムゾーンは、地球標準時を起点に、8時間差で運用されている。いずれの宇宙都市でも、ゾーン1が地球の世界標準時と同じ時間帯だ。宇宙都市の回転は、その正午に各タイムゾーンの真上に太陽が来るように調整されている。月や火星のような1日の長さが異なる場所でも、都市は基本的にこの3つのタイムゾーンで運用されているので、人の生活リズムが狂うことはない。長距離航路の客船なども、航行中はこの8時間シフトで運用されている。厳密に言えば、航行中は相対論的効果で時間がいくぶん遅れる。だが、ワープ航行がそのほとんどを占める恒星間航路では、逆にそれはあまり問題にならない。むしろ、通常航行で高速飛行する太陽系など恒星系内の長距離航路の方がこの影響が大きく出たりするのである。つまり、微妙な時差が発生するのだ。この時差は到着地まで維持されるので、場合によっては、多少調整が必要になる。

さて、今回の旅行の目的地は地球である。ここだけは、先に述べた話の唯一の例外だ。地球の標準時は今も、地域ごとに細分化されている。今回行く東京は地球標準時から9時間進んでいる。つまり、宇宙都市のゾーン3とほぼ同じ時間帯である。今、俺たちが生活しているのはゾーン1だから、かなり大きな時差になる。大昔は、体内時計を調整するために長い時間を要した。だが、今は薬を一粒、決められた時間に飲むだけで、かなり緩和される。昼夜が逆転するような時差でも、1日〜2日で新しい生活時間に完全適応できるのだ。

「搭乗開始はまだみたいだね」

「シャウラか。これに乗るのは久しぶりだな」

「ていうか、人の操縦で宇宙を飛ぶこと自体が久しぶりじゃない？」

「そうですね。でも、たまには、ゆっくり飛ぶのもいいかもしれません」

「それって、もしかして嫌み？」

「いえいえ、そんな意味じゃ」

おやおや、マリナらしくない失言。早速、美月に噛みつかれている。珍しい光景だ。彼女も、この旅に少し浮かれているのだろうか。俺としては、マリナの肩を持ちたい気持ちで一杯なのだが、出発前から波風をたてても困るので、おとなしくしておくことにしよう。

透明な強化シールドを通して、ゲートの外側に係留されている小型シャトルの姿が見えている。スコピオン社製の短距離シャトルLS430型、通称シャウラⅢは、地球近傍航路に主に使われているベストセラー機だ。箱形の機体はいかにも無骨だが、真空の宇宙空間を運航す

るには、むしろ、充分な機体強度を確保できる方がいい。当然、シールド装置やデフレクターと呼ばれる偏向スクリーンは備えているが、万一、小さなデブリなどが直接衝突しても、ある程度は持ちこたえられる物理的強度も持っている。エンジンは噴射式のスラストと、非常用の高密度プラズマエンジンのみ。実際、地球近傍航路では、宇宙都市の電磁カタパルトで、かなりの初速を持って打ち出され、途中にいくつか配置されている加速ステーションからの指向性磁場によって加減速とコース修正を行うため、推進力としてのエンジンは非常時以外には不要なのである。到着時も、宇宙港からの指向性磁場に捕捉され、減速、誘導されるから、着陸前の姿勢制御さえできれば問題は無いのである。こうした方式は、もう300年ほど前に実用化されて、地球近傍の移動や物流コストを大幅に削減することになったのである。



やがて搭乗開始のアナウンスがあつて、俺たちはシャトルに搭乗する。窓側2列、中央2列の6列のシートは、意外とゆつたりしている。大きめの窓は強化シールでできていて、放射線などをブロックするほか、太陽光なども自動的に調節してくれる。まあ、この時代、窓なんというのは、あまり意味が無いかもしれない。その気になれば、壁全体をスクリーンにすることもできるし、視覚インターフェイスのサラウンドモードで、周囲の景色を直接意識に投影することもできるのだから。あえて言うなら、それぞれの好きな楽しみ方ができるように窓は残されていると言うべきなのだろう。

「本日は、第6ステーション行きシャトル便にご搭乗いただき、ありがとうございます。当機はまもなく出発いたします。出発に際し、機内の安全設備をご案内します・・・」

おきまりのアナウンスが流れると同時に、目の前の空中に案内映像が流れる。これは、視覚インターフェイスに対してアウトバンドから直接送られてくる映像である。音声も聴覚に対して直接送られる。これらは、すべての乗客に対して例外なく送られ、一切拒否することができない。法律上インターフェイスへの強制介入が認められている数少ないケースのひとつである。映像が終わると、頭上のベルトサインが点灯する。ベルトサインと言っても、シートベルトがあるわけではない。空間粘性制御によって、体が周囲の空間から受ける抵抗力を強めることで、体をやんわりと固定するシートホールド装置が、こうした宇宙艇や航空機には装備されている。これは、慣性質量制御とも連動していて、機体の加減速で生じる加速度を含め、適切に制御されるのである。力を抜いていれば窮屈さはほとんど感じない。手足も自由に動かせる。だが、立ち上がるうとしても無駄である。どれだけ力を入れても体はしっかりとシートに固定されている。

「当然、サウンドで行くよね」

ケイが言う。

「当然でしょ」

すかさず美月。普通の乗客は出発時にサウンドモードは使わない。電磁カタパルトで一気に秒速数百Kmまで加速されるのだから、目を回すのがオチだ。そんなことを楽しんでやるのは、普段からそうした訓練をしているアカデミーの学生か、絶叫系オタクくらいである。

「いつも訓練で見てるのに、よく飽きないな」

「まあ、そうなんだけどね。いつも見慣れてるから、逆に見てないと不安じゃない？」

「そんなもんかな。俺は休みの時くらい、お客さんモードを満喫したいんだが」

と言いつつ、俺もなんとなくサウンドモードに切り替える。シャトルはちょうどゲートを離れて、カタパルトに向かってるところだ。前方には、同型のシャトルが二機。俺たちは3番目らしい。ちょうど一機目が打ち出されるところだ。矢のように、という言葉がふさわしい光景である。銀色の機体が、一瞬後には、遙かかなたに消える。既に視界から消えてしまっているシャトルの残像が、細い針のように宇宙空間に伸びていく感じだ。差し渡し20Kmはある宇宙都市も、この速度だと、一瞬ではるか後に消えてしまう。傍から見えてこれだから、実際にサウンドのまま飛び出したらどんな感じかは想像できるだろう。しかも、サウンドでは、目を閉じるという芸当ができないのである。なにせ、画像は直接意識に投影されている。しかも、上下左右、背後も含めてすべての方向がリアルタイムに「見えている」のである。もちろん、サウンド酔いしないコツはある。なるべく遠くの、動きが少ないものに意識を向けておくのだ。たとえば、空を埋めている星である。まあ、そんな手を使わなくても、俺たちは日頃、いやというほど酔いそうな状況を経験している。美月の操縦で飛んでいるときのことを思えば、旅客用シャトルなんかハエが留まりそうに見えるのも事実だ。

やがて俺たちのシャトルの順番がやってきた。カタパルトに押し出されたシャトルは一旦静止する。宇宙港は、巨大なトンネルだ。その内側に様々な構造物やら、船やら、それらの灯りが所狭しと並んでいる。次の瞬間、それらがすべて残像となり、俺たちは星の海に浮かんでいた。

「飛んだ飛んだ」

「あんだねえ、何を子供みたいにはしゃいでるのよ。恥ずかしいわね」

「だってさ、やっぱ旅行だしね。わくわくしない？」

「そうですね。いつもの飛行とはちょっと違いますよね。なんだか楽しいです」

マリナがこんな風にはしゃぐのは珍しい。確かに旅つてのは、気分を浮かれさせるものなのかもしれない。

「でも、こうやって見ると殺風景よね、この景色は」

「ほとんど情報が無いのが不安」

「たしかにな。でも、民間船だし、仕方が無いさ」

普段、俺たちはサ라운드画像を重ねて、様々な飛行パラメータやら航路図やらの情報に囲まれている。だが、民間船ではそんなデータはない。片隅に、飛行距離と到着予定時刻などが小さく表示されているだけである。俺たちは無意識にフライトデータを見て、船の状況を把握することで安心感を得ているのかもしれない。

「そう思って、ちょっと仕掛けを持ってきたんだ。情報共有モードにしてみてよ」

「仕掛けって？」

「ジョージ、また変なもの作ったんじゃないでしょうね」

そう言いながら、俺たちは情報共有モードに入る。そのとたんに、様々なフライトパラメータや航路図、近くを飛行している船の位置などが視界に加わった。

「え？これってどんな手品なの？」

「すごいな。訓練艇に乗ってるみたいだ」

「まあ、民間船だから乗客が入手できる情報は少ないんだけどね。とりあえず、可能な範囲でフライトコンピュータからデータを取って出してみたんだ。あ、美月の直通回線も一部使わせてもらってる」

「あんだねえ。先に言いなさいよ。使用料取るわよ」

「でも、この処理能力はすごいな。いったいどうやって・・・」

「あんだ、まさかまた・・・」

「あ、さすがに、この船のコンピュータは無理。やったら退学ものだし・・・。ちょっと工作してみたんだ」

ジョージがポケットから小箱を取り出す。コミュニケーターくらいの大きさだが、薄緑色に光っている。

「それ、コンピュータか？」

「ああ、でも、普通のコンピュータじゃないよ」

「量子演算ユニット、まさかセンターコンピュータの？」

「ミニチュア版のレプリカだけどね。でも、これ一台でST1B型宇宙艇の旧式コンピュータくらいの演算能力はあるんだ」

「もしかして、例のプロジェクト？」

「そうだよ。例のプロジェクトの試作品チップを使ってる。消費するエネルギーがずっと少ないから持ち運びもできるんだ。あくまで試作品だから、もしかしたら壊れちゃうかもしれないけど」

「でも、ST1Bのコンピュータ更新は、2Aシリーズのコンピュータを使うんじゃないのか？」

「うん、基本的にはそうなんだけど、どうせなら、2Aシリーズも含めて演算能力を大幅に強化しようという話になり始めてるんだ。まだ決定じゃないんだけど、このチップを使って量子演算ユニットを置き換えれば、能力は数倍にできるからね。しかも、これなら非常用パワーでも、フル稼働できる」

「興味深い。量子ビットの多重化率がずいぶん上がっている」

「さすが、サム。そこに目をつけるとはね。多重化率を上げることで、チップの小型化と高速化、省エネを一気に全部やろうってのが、こいつのコンセプトなんだ」

「でも、最適化が難しくなる」

「そのとおり。多重化率向上で、並列演算の能力は上がるんだけど、すべての計算が並列演算向きとは限らない。最適な順序や並列度で処理をチップに振り分けることができないと演算能力が無駄になる。そのためスケジューリングや問題の最適化が数段難しくなるんだ。プロジェクトの目下の課題は、そのためのアルゴリズムを決めることなんだよ」

「俺はコンピュータのことはよくわからんが、それって改良というよりは、完全に作り直しに近いんじゃない？」

「そうでもないよ。演算ユニット以外の部分は、これまでのものが使える。最適化はソフトウェアの仕事だからね。効率のいいアルゴリズムさえ見つけられれば、制御ユニットの高速化は必要ないのさ」

ジョージは楽しそうだ。1Bシリーズのコンピュータ更新プロジェクトに参加してから、ジョージはかなりの時間をそっちに使っている。授業が終わると、すぐにアカデミーの情報研究

センターに行き、結構遅くまで帰ってこない毎日なのである。基礎課程の学生で、研究プロジェクトに参加できるのも異例中の異例だが、その中で、ジョージ自身が占める役割はどんどん大きくなっていつているらしい。

「そう言えば・・・」

ジョージがまた口を開く。

「あっちのプロジェクトにも、顔を出せそうなんだ」

「あっちのって？」

ケイが聞く。

「ヘラクレス3のコンピュータのクローンをアカデミーで動かすってやつ。実は、このチップは、むしろそっちのために開発されているものなんだ」

「そうか、あれも動き出すんだな。作業はもう始まっているのか？」

「ハードウェアはほぼできあがっている。使っているユニットは今のバージョンだけだね。基本ソフトウェアは今週中にヘラクレス3から持つてくることになるんだ。うまく動いたら、順次演算ユニットを新型に置き換えていく予定らしい。うまくいけば、演算能力は今のセンターコンピュータ並にできるって話だよ」

あのプロジェクトは俺も気になっている。あの時、ヘラクレス3での不思議な体験の謎解きはまだできていない。たぶん美月も気になっているはずだ。俺たちが感じたあれは何だったのか。もしかしたら、答えが得られるかもしれないと期待しているわけだ。ジョージが参加しているのも好都合だ。色々と情報も得られるにちがいない。

「研究はいいけどさあ、ジョージ、遅刻回数そろそろヤバいんじゃないの？」

いきなり突っ込みを入れたのはケイである。

「あはは、それは言いつこなしたよ」

「言いつこなして、マジヤバイよ。研究がうまく行ったって、落第しちゃ、まずいでしょ」

「たしかに。実は終業式の日、フランク先生にも言われた・・・」

「あんたね、ただでさえ遅刻魔なんだから、気をつけないと本当に落第よ！」



美月も加わってジョージを責める。たしかに、このところ、毎週一回くらいはやらかしているジョージだ。規則上は遅刻3回で欠席一回扱いだから、毎月一日から二日欠席している勘定になる。生徒の能力次第で自由にあれこれ出来るアカデミーだが、こうした基本的なことには結構厳しいのだ。天才を絵に描いたようなジョージでも、さすがに、これが続けちゃまずい。

「そういえば、パパも結構遅刻魔だったって、ママが言ってたわ」

「そうなのか？そう言えば、美月の親父さんもアカデミー歴代指折りの天才の一人なんだよな」

「天は二物を与えず。よく言ったものよね。パパも研究で夜更かしして、朝、ママが起こしに行っても全然起きなかつたらしいから」

美月の親父さん、あの有名な遺伝子工学者のアンリ・ガブリエルも遅刻魔だったとは。そんな話は今初めて聞いた。いずれ、ジョージも自分の子供にこんな事を言われるのかもしれない。

「そろそろ月軌道にかかるよ」

ケイが言う。この速度だと、L2から月軌道までの110万Kmほどの距離はあつという間だ。シャトルは月軌道面に三つある宇宙都市のひとつに接近し、その指向性磁場で大きく減速して軌道を変える。月軌道の内側は混雑が激しいので、かなり速度を落とす必要がある。むしろ、ここから地球静止軌道までのほうが時間がかかるのである。前方に、ルナ・ステーション3が見えてくる。軽いショックがあつて、シャトルは指向性磁場に捉えられ、一気に減速し、ステーションをかすめるように通過した。ルナ・ステーションもL2や静止軌道ステーションと同規模の巨大宇宙都市である。地球の極方向から見ると、これらのステーションは地球を取り巻く宝石のように見える。このため天使の首飾りとも呼ばれているのである。これから俺たちが向かうのは、最も内側のリング、静止軌道ステーションだ。